

琉球大学学術リポジトリ

古人類学上の遺跡と観光資源

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2012-01-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中務, 真人, Nakatsukasa, Masato メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002006798

古人類学上の遺跡と観光資源

Can paleoanthropological sites be tourism resources

中 務 真 人*
Masato Nakatsukasa

私は赤道直下の東アフリカに位置するケニア共和国で化石類人猿の発掘調査を実施している。こうした研究を古人類学、あるいは先史人類学とよび、歴史時代よりもはるかに古い時代、現生人に至る系統がどのように進化をしてきたかを、もっぱら化石証拠とそれが出土する地域(化石サイト)の古環境復元から研究する。人類の生活した遺跡や残した遺物を対象とする(先史)考古学とは異なる。野生類人猿の観察調査も、もともとは化石から覗うことが難しい初期人類の社会行動、生態特徴などを類推するために始められた。そうした点でこれらの研究は同根だが、学術面はさておき、観光としての可能性になれば、野生類人猿と化石とでは天と地ほど異なる。ゴリラやチンパンジーを見るために大金を払ってでもアフリカの山野を訪れたい観光客は、少なからず存在する。しかし、化石の発掘現場に、ただその作業(あるいはかつて作業が行われていた状態)を見に来る観光客はきわめて少ないことは容易に想像できるであろう。しかも、名前の知られた化石サイトへ行ったとしても、通常は化石を見ることはできないのである。化石は稀な状況でしか生成されないし、良い化石は滅多に発見されない。その上、発掘された化石は、博物館へと持ち去られる。断っておくが、古人類学自体が一般の関心を引かないわけではない。アメリカの地理協会が発行しているナショナルジオグラフィックマガジンは各国語版が発行され、自然科学を中心とした美しい写真と解説記事で多くの読者をもつが、そこに古人類学の記事は一年間に複数本載るし、数年に一回は、新しく発見された重要な化石の写真が表紙を飾る。古人類学分野における日本の研究チームの数は少ないものの、世界的に見れば、マクロ系生物学の中でも華やかな分野の一つなのである。

およそ産業化には向いていない古人類学の遺跡の話をあえて持ち出す理由は、沖縄と古人類学は独特な結びつきがあるからである。石灰岩質の琉球列島は、酸性土壌の本土と対照的に、化石の形成と保存には好適な土地である。よく知られた縄文時代は約13000年前に始まる。それ以前を文化編年では、旧石器時代とよぶ。日本国内には、これまで9カ所の化石サイトで旧石器時代の人骨が発見されているが、静岡県浜北を除き、全てが琉球列島にある。初期人類化石のようなものは、その子孫たる現生人の共通財産として普遍的価値をもつべきものだが、その産出国にとって、そうした存在が国家の象徴のようにうけとられていることは、この調査をアフリカで長く行って、つくづく感じている。「最古の日本人」が沖縄に認められることは、日本への南の入り口であった琉球列島のアイデンティティを体現していると言えるのかもしれない。

東アフリカで最も有名な化石サイトはオールドバイ峡谷である。この地は半世紀前に東アフリカ初の猿人化石を産出したばかりでなく、アフリカ旧石器考古学の誕生の地であり、さらに、放射年代測定法によって世界で初めて古人類化石の年代が決定された地である。私は2009年に、ここを始めて訪れる機会を得た。タンザニア北部アルーシャで開催された国際会議のエクスカージョンで、参加者全員が十数台のランドクルーザーに分乗して、片道5時間かけて訪れた。アフリカで化石の発掘調査を

* 京都大学大学院理学研究科

するようになって20年以上もたち、初めての訪問は感慨も感じたのだが、一方で、そうした歴史的事実を知っている一般観光客がこの場所を訪れたとして、いかに興味をそえられるかとも考えた。層をなす溶岩流と堆積層土壌がむき出しになっただけの、ほこりっぽい、水の流れていない浅い谷である。化石サイトでは普通に見られる光景で、見慣れない人にとっては最初驚くかもしれないが、とってグランドキャニオンのような壮観さはないし、美しくもない。実際、ビジターセンターは、われわれエクスカージョン組を除けば、わずかな訪問客しかいなかった。後日、オールドバイを巡る観光ツアーがあるのかを調べたが、当然、オールドバイだけを目的とするツアーはない。オールドバイ峡谷は世界最大のサバンナ型国立公園であるセレンゲッティ国立公園内にあるため、サバンナのサファリツアーに組み込まれて存在する。観光客は、かつて何十年も人類化石を探し続けた研究者の苦労を、ほこりっぽいでこぼこ道のドライブの末いささか実体験し、そそくさと動物のいる場所へ向かっていくのかもしれない。

古人類学の遺跡が必ずしも観光資源として不向きなわけではない。オールドバイから荒れた道をさらに3時間車で走れば、ラエトリと呼ばれる化石サイトがある。ここは1972年に370万年前の猿人の足跡が発見された場所である。3人の猿人が数十メートルにわたり、大地を埋めつくした湿った火山灰の上を他の多くの動物とともに歩き、その足跡が奇跡的に風化を免れて、地層の中に閉じ込められ石化した状態で発見されたのである。これなど悪路にかかわらず、サイやゾウの群程度の観光資源価値があるかもしれないが、発掘調査の後、風化による損傷を防ぐため、埋め戻されてしまい、今は見るできない。

一方で、化石サイトが観光資源として成功している希少な例が南アフリカ共和国にある。ハウテン州にある石灰岩洞窟地域は「人類のゆりかご (Cradle of Humankind)」地域として、世界遺産に登録されている。この地域は世界で最初に猿人が発見されたタウング採石場も含んでおり、現在でもほとんどのサイトで化石の発掘が継続的に行われている。中でも、ステルクフォンテイン洞窟は1947年以来、数多くの猿人化石を産出しており、1997年には洞窟にたまった石灰角礫岩に埋まった猿人の全身骨格（愛称「リトルフット」）が発見された。南アフリカの古人類化石は石灰岩洞窟にたまった骨が、石灰岩の崩落によって二次的に形成された角礫岩とよばれる非常に硬い母岩に埋まり形成される。そのため、発掘は容易ではなく、洞窟内にエアドリルを持ち込んで発掘が行われる。「リトルフット」も最初は足だけが発見されたのだが、掘り進むにつれ、体全体が残っていることがわかったのである。今でも発掘が続けられている。こうした作業を見学することが可能であれば、観光客も訪れるであろう。「人類のゆりかご」地域は、僻地にある東アフリカの古人類学サイトと異なり、ヨハネスブルグからわずか50kmという地の利もあり、多くの観光客を集めやすい。欧米の博物館に引けをとらない立派なビジターセンターもあるが、傑出しているのは、一定の期間ごとに入れ替えを行いながら、本物の（重要な）化石を展示する点である。本来、研究に資すべき化石を展示することについては、実のところ議論がある。観光資源としての化石の価値を重視するような風潮が起これば、化石産地（遠隔地）と化石が展示される中央との間で、利益をめぐる軋轢が生じる。また、地権者や自治体が経済価値に目をとられるようになれば、研究者にとっては、発掘調査が困難になる可能性がある（発掘権を巡る研究者間の争いをかき立てることもある）。博物館での資料調査も展示によって制限される上、壊れやすい標本の移動を不必要に増やすなど問題が多い。とは言え、欧米の博物館が、ハイテク技術でいくら立派な展示を作ったとしても、本物という付加価値をつけることは不可能である。

私が長らく通っているケニアで、古人類化石サイトが集中しているのは、エチオピア国境から南北に長く延びるトゥルカナ湖（オモ・トゥルカナ盆地）の周辺である。東岸のコービ・フォラ、イレレ

ット、西岸のエリア・ベイなどの重要な化石サイトでは、現在も発掘調査が行われ研究者の注目を集める大きな発見がなされている。とはいうものの、こうした調査地は広大な広がりを持ち、小規模なビジターセンターはあるものの、観光客はどこに行ったらよいか途方に暮れるだろうし、発掘現場が観光客に開放されているわけではない。ケニア北部の乾燥地帯にあるトゥルカナ湖は、アフリカで最も塩分濃度が高い湖で、その周囲を含む独特な生態系と人の手がわずかにしか及んでいない大自然によって、世界遺産に登録されている。トゥルカナ盆地が人類進化研究に果たしている特殊な地位もその登録理由に含まれている。しかし、トゥルカナ湖へのサファリには、自動車で片道最低3日を必要とするなど一種の秘境観光に近い（あるいはチャーターした飛行機で空から観光する）。多くの人を集められないという点で観光資源としての価値は限定的と言えよう。

ところが、こうした地であっても、古人類学を対象としたフィールドスクールは営利活動として成功している。これは、化石の発掘キャンプに大学生を数週間滞在させ、実際に発掘に参加させながら、人類学、古生物学、地質学、先史考古学などの講義実習を行うプログラムである。これらは、提携大学においては正規の講義と同様に単位認定される。フィールドスクールの相場は2週単位で6000ドル程度である。ナイロビを離れてからの全ての経費はこれに含まれるが、ナイロビまでの旅費はこれに含まれない。大学によっては、この一部をサポートする制度もあるものの、毎年50名程度（その多くはアメリカだが）の大学生が100万円を超える大金を費やしてフィールドスクールに参加する。その利益は、調査資金および調査地域の発展のために使われる。これまでケニアでは、ケニア国立博物館とニュージャージー州立大学ラトガース校がおこなうフィールドスクールが長く続いてきたが、昨年からは新たに設立されたトゥルカナ盆地研究所とニューヨーク州ストーニーブルック大学の提携で行われるフィールドスクールも始まり、競合しながら学生を集めている。タンザニアでもオールドバイやラエトリを対象としたフィールドスクールが、コロラド州立大学デンバー校によって行われている。

まとめれば、古人類学の化石サイトは、通常そのままでは観光資源にはならない。そこに付加価値をつける工夫が重要である。調査が行われていない「死んだ」サイトよりも調査が行われているサイトの方が魅力はあるだろう。実のところ、よそからやってきて地域の「資源」をもち去るのは、われわれ研究者の宿命であり、一種の負い目のような気持ちもある。観光活動を通じた社会教育という理解が得られれば、お互いの良い関係が築かれるのかもしれない。